

「観点別評価一体型ICTツール」と「反転授業」を用いた歴史総合の指導と評価

勝間田 秀紀

高等学校で昨年度から始まった「歴史総合」の実施にあたって文部科学省の『学習指導要領解説』においては、「主体的・対話的で深い学びを実現するために、課題を設定し、その課題の追究のための枠組みとなる多様な視点に着目し、課題を追究したり解決したりする活動が展開するように学習を設計することが不可欠である」と規定している。しかし、スタートしてみて、歴史総合の授業で課題を抱えている先生方も多いと思う。現在、歴史総合の授業が抱えている課題としては以下のようなものがあげられるのではないだろうか。

(1)「適切な探究テーマや教材の選定」への負担

探究的な授業をおこなう際には、生徒の思考をうながすような適切な探究課題の設定やそれに関わるサブクエスション(SQ)、探究課題を解決していく生徒の思考にそった適切な教材や資料の選定が必要となる。現場の教員はその準備に時間をかけることが難しい。

(2)学習範囲の未了

昨年度の歴史総合で問題となったのが履修範囲の未了である。歴史科目では通史的な学習に丁寧な説明を必要とするが、それに加えて社会的事象の歴史的な見方や考え方を育てていけるような探究的な学習機会はもちろん、過去から現在や世界と日本とを大観し、その関係性や現代的な諸課題との関連などを探ることも意識しなければいけない。こうした探究的な授業の確保のため通常授業の時間がおされてしまう問題が生じている。探究的な学びを進めたいと考えている先生方の共通の

悩みが、通史的な学び、知識理解を扱う時間との兼ね合いではないだろうか。

(3)観点別評価の負担

新『学習指導要領』で出された3観点による評価のうち「主体的に学習に取り組む態度」は、その評価のためには毎時間の振り返りをおこなったり、生徒に意見を書かせて提出させたりといった評価材料が必要である。それを増やそうとすることが教員の負担増につながるといった状態におちいつている。

こうした課題は歴史総合に限らず地理歴史系探究科目でも生じている、あるいは今後生じてくる問題であろう。筆者はこうした歴史総合における課題の解決につながる取組みができないかと考え、探究活動用ICTツールの開発を進めており、そのなかで反転授業を使った授業実践および観点評価ツールを考案してきた。これについて紹介していきたい。

主体的に学習に取り組む態度のとらえ方

まず、観点別評価の1つである「主体的に学習に取り組む態度」について概観しておきたい。「主体的に学習に取り組む態度」は2つの要素がある。1つは「粘り強く学習に取り組む態度(以下「粘り強さ」)」で、もう1つは「自らの学習を調整しようとする態度(以下「調整」)」である。「粘り強さ」は、粘り強い課題への取り組みや、課題を最後までやりきる姿勢、授業外での取り組みなどを評価するもので、挙手の有無や発言の回数、提出の有無など表面的なことで評価してはいけない。「粘り強

さ」を評価するにあたって教員は、挙手はしていないが頭のなかで考えている生徒を評価でとりこぼさないことが重要であり、そのためには生徒の内面的なものを表出させる必要がある。

「調整」は生徒が自身の学びをメタ認知して、学習の進め方や学習方法などを試行錯誤して工夫していく点を評価するもので、粘り強く学習に取り組んだり、課題を最後までやりきるなかでの自己調整を評価するものである。授業では生徒に実施させた「振り返り」によって評価をしているケースが多いように思う。ただしこの「調整」は「粘り強さ」の活動のために調整していく姿勢を評価するものであるため、振り返りなどによる自己調整評価のみをもって主体性を評価しないようにすべきである。

以上の前提をふまえ、反転授業とICTツールを使った授業実践および評価の取組みについて述べていきたい。

予習～反転授業

筆者の歴史総合の授業では、おおむねすべての時間で反転授業をおこなっている。生徒は授業前に10分程度の動画を視聴したうえで授業にのぞむ。ここで生徒が視聴する授業動画は筆者自作のもので、自分のYouTubeチャンネルを設立して、公開している^①。反転授業の実施によって授業での講義が一切不要となり、授業時間のほとんどを探究の時間にあてることができるうえに、進度の遅れもほぼ生じない。10分という動画の長さは休み時間でもギリギリみられる長さを意識している。Z世代の生徒はYouTubeが生活の一部となっているため、授業動画に対する拒否感はなく、試験前などにも効果的に活用している様子がうかがえる。歴史総合を高校1年で履修する場合、入試・共通テスト本番までには1年以上のブランクが生じてしまうが、高校3年の受験勉強で忘れていた内容を復習する際、動画で同じ授業が再現できるのは

非常に効果的だと考える。

MQとSQによるワークと指導の個別最適化

本実践で使用するICTツールは生徒用のワークシートと教員用の評価ツールにわかれている。本校のICT環境は、生徒が1人1台のPCを保有し、Wi-Fi環境が整備されている。また、Google Workspace for Educationを利用しており、本授業で生徒がおこなうワークシートと教員用の評価シートはGoogleのスプレッドシートを使った自作のものである。

授業開始時に予習動画の確認テストをおこなったのち、単元のハイライトとして重要部分のみを全体で確認する。ここまでで開始10分弱である。通史的な学びはすべて動画視聴によっておこなっているため、講義は一切おこなわず、残りの授業時間はすべて探究の時間にあてている。

探究活動は単元の課題となるMQ（メインクエスト）とそこにたどりつくためのヒントとなる数問のSQ（サブクエスト）で構成している。SQは資料の読み取り課題や資料と知識を組み合わせる課題が多く、教科書の史資料や教科書の問いで構成することも多い。生徒はSQへの解答に取り組み、その後、それを参考にMQを考えていく。SQはそれぞれ個別のシートに記載するが、MQのシートにSQの解答が自動で反映されるようにしており、SQで考えた内容をもとにMQの解答を考えていくことができる（図1-1）。

生徒は協働学習の形式でSQとMQの解答を考えていくが、Google Classroomで生徒に配信したワークシートのリンクを用いて生徒の解答を教員用ツールと紐づけているので、生徒がシートに記述した内容はリアルタイムで教員用ツールに反映されるのが大きな特徴である（図1-2）。教員は生徒の書いた内容や課題の進捗状況を手で適宜確認できるので、必要な生徒に声かけや軌道修正、必要に応じて全体での確認をおこなっていく

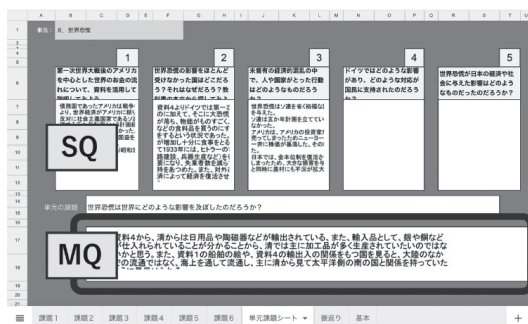


図 1-1 生徒用個別ワークシート

ことができる。生徒の到達度にあわせた個別最適化した指導が可能になる。

探究活動の即時フィードバック

教員用ツールの各生徒の解答閲覧画面にはチェックボックスを設定している(図 1-2)。生徒が書いたもののうちよい意見にチェックをすると、それが教員用ツールにある黒板投影用シートに抽出されるように設定してあるので、参考となる生徒の意見を電子黒板で全体確認・共有することが可能である。

一般的に授業の最後におこなわれることが多い「振り返りシート」は、観点別評価の導入にともなって広く活用されるようになったが、個人的には社会科の授業との親和性はあまり高くないと考えている。たとえば授業の最後に内容的な振り返りをおこなった際、ある授業の範囲で生徒の理解度が低い結果となった場合に、その内容をつぎの授業でおぎなうということが、進度のことを考えると社会科の授業では難しいように思う。進度を犠牲にして復習をするか、生徒の理解が弱い部分はそのままになってしまうことが多いのではないかと。本実践で用いる教員用シートは、授業のなかで生徒がどこにつまずいているか、どこが理解できていないかが、その場でリアルタイムに把握できる。そのため個々の生徒のつまずきを授業のなかで即時おぎなっていくことが可能で、個別最適化したフィードバックを、進度を遅らせることなくおこ

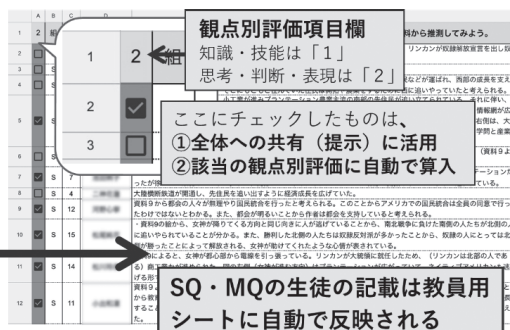


図 1-2 教員用評価ツール

なっていくことができる。本授業でも振り返りは実施しているが、これはあくまでも観点別評価の「調整力」を評価するためのものである(後述)。

授業内で観点別評価をすませる

ICTツールを使った観点別評価についての取組を紹介したい。探究活動を通じて3つの観点の評価するために、授業では、資料の読み取りがメインの課題であれば「知識・技能」、資料と知識を組み合わせるなど課題の解答に思考力や判断力を要するものは「思考・判断」という風に、生徒に配布するシートのSQの内容に応じて「知識・技能」「思考・判断」の主要観点を事前に生徒用シート上に設定しておく。MQはSQの解答を組み合わせることで考えていく課題であるので「思考・判断」として設定している。前節の「探究活動の即時フィードバック」(図 1-2)で意見の共有の際に使用したチェックボックスは、観点別評価表とも紐づけをしているので、生徒の記載内容のうち、よいものにチェックをしていくことで、「知識・技能」に設定した課題は「知識・技能」の観点に、「思考・判断」に設定した課題は「思考・判断」の観点に自動で計算されていく(図 2)。探究シートをおこなううえでの「知識・技能」「思考・判断」の観点評価については、このチェックを活用することで、すべてではないが、授業時間内にある程度すませてしまうことが可能である。

「主体的に学習に取り組む態度」については、生

